

菱刈晃夫著『メランヒトンの人間学と教育思想』

(成文堂、二〇一八年、四九七頁)

加藤喜之

ルターの右腕として宗教改革運動を精力的に推し進めた立役者メランヒトン。その名を知る人は多い。しかし「ドイツの教師」(Praeceptor Germaniae)という榮誉ある称号を贈られ、人文主義、神学、聖書解釈、古代哲学の全分野において圧倒的な業績を残し、初期近代の教育思想を全面的に刷新した彼の姿は、現代において忘れ去られてしまつたと言つてよいだらう。本書はそのようなメランヒトンの教育哲学についての研究であり、教育に関する彼の中心的な著作の翻訳である。

著者は、宗教改革期の教育思想を専門とする研究者であり、二〇〇一年には溪水社から『ルターとメランヒトンの教育思想研究序説』、また二〇〇五年には成文堂から『近代教育思想の源流』を出版している。著者によると、本書はこれらの著作を序説とする本論であり、メランヒトンの思想世界の全体像をその人間学と教育を中心にして俯瞰する試みだとう。全体の構成は二部からなる。第一部は著者が二〇〇八年以降、学会誌等で発表した八つの論文に加筆・修正を施した

ものであり、第二部は十四の著作の邦訳である。以下、まずは第一部の概要をみていく。

第一章では、メランヒトンの生涯が人文主義とルターの宗教改革との関係において簡潔に描き出されていく。彼の生涯についての翻訳をすでにいくつか出版している著者により、得意な分野であろう。エラスムスに代表される十六世紀人文主義に学んだメランヒトンは、若くしてヴィツチベルク大学のギリシア語とギリシア文学の教授として招聘される。そこで出会つたのがルターであり、彼との出会いのなかで宗教改革者としてのメランヒトンは成長していく。その中で人文主義者としての「原点回帰」(ad fontes)といふ要請は、宗教改革者としての「聖書へ立ち返る」(ad scripturam)といふ要請と重なつていつたと著者は述べる。こうした記述に加えて、本章の最終節ではメランヒトンの思想の構造とその特質が明らかにされる。それによると、彼の思想の中核には、言語学、自然学、倫理学、神学があり、それぞれ組織的な著作がある

という。さらにこの中核は福音と律法、信仰と理性という二つの分野に分けられている。そこから派生するかたちで、一方に自然学や倫理学の古典的な著作の注解があり、もう一方に旧約聖書や新約聖書の注解がある。また、このドイツの教師はこうした体系をわかりやすく教育するためにカテキズムを執筆したのだと著者は論じる。

第二章では、メランヒトンの教育についての考えが人間論を中心いて扱われる。というのも著者によると、教育とは人間のための教育であり、それを効果的に行うには体系的な人間についての理解が要請されるからである。まず著者は初期近代に生まれた學問として「人間学」(anthropologia)を紹介しており、その代表的な論者をあげる。彼らの人間学は、大きく靈魂論と身体論に分けられるといふ。こうした靈肉二元論はプラトン主義の影響を受けており、靈あるいは精神の優位性を謳いがちである。しかしメランヒトンは身体を重んじるルター神学の影響下にあり、なかでも解剖学的で医学的な彼の身体論はこうした從来の二元論の枠組みを逸脱するといふ。著者は、ここにメランヒトンの人間学の特性をみる。すなわちこのドイツの教師にとり人間学とは全世界をつらぬく神の法を理解することであり、また、その法は自然法として人間の身体を従えているので医学、さらには身体に影響を与える星の動きを研究する占星術を通して明らかにされ、最終的にその法は魂を従えているので倫理学を通して明らか

にされる。

さらにメランヒトンはルターの信仰義認論における恩恵といふ概念さえもできるかぎり「自然の原因」によって説明していく。このドイツの教師によると、聖靈としての神が福音を通じて人間に語りかけるという現象は、あくまで物質的な精気(spiritus)の生理学的な変化として説明できるという。

聖靈は、文字と音声を通して身体の一部としての心臓に入り、生命精気と交わる。聖靈の影響をうけた人間の精気は、血液を通して全身に行き届く。こうして愛や希望や喜びなどの善い感情が人間のうちに生まれ、怒りや情欲など悪い感情は退けられる。

第三章は、メランヒトンの教育理念に焦点を置く。そこで著者が注目するのは一五五三年に出版された『魂についての書』であり、本章ではこの書物の詳細な分析がなされる。それによると、人間の魂には五種類の能力があり、それは植物的、感覚的、欲求的、驅動的、理性的な能力と呼ばれる。なまでも教育理念の理解に重要なのは、最後の理性的な能力である。この能力は精神(mens)とも呼ばれ、それによつて人間は神的なものに参与できるといふ。というのも、人間の精神は神の精神に類似しており、よつて「神の像」(imago Dei)として神を認識できるからである。こうした魂の理解に基づき著者は、この神の像を再生させていくことにこそ教育の目的はあると主張する。

本章はさらに魂と教育の関係を掘り下げていく。メランヒトンによると、精神としての人間の魂のうちには、神によつて植え付けられた自然の知識があるという。それはまず認識者の生活を統御する「学芸の種子」(semina artium)であり、そこから自然についての理論的な知識、さらには道徳哲学に発展するような実践的な知識へと成長していく。これらの知識を大きく育てていくことで、人間は神の法の全体像を知り、それに従い生きることができる。こうした生活がメランヒトンの目指す「学識」(eruditio)であり、「敬虔」(pietas)である。こうして神の像の再生、ひいては教育の完成が成し遂げられると著者は述べる。

第四章は、メランヒトンの教育理念がどのようななかたちで実現されていったかを明らかにするために、ヴィツテンベルク大学における改革に注目する。第一節では、一五二八年にメランヒトンが着任する以前と直後の大学の様子が描かれている。一五〇二年に開学した若い大学であつたこともあり、当初から旧態依然としたスコラ学ではなく、人文主義やオットカムの伝統を引きつくる新しいスコラ学の方法が導入されることに大きな抵抗はなかつたようである。メランヒトンの着任はこうした傾向をさらに加速させる。第二節では、メランヒトンの思想に大きな転換を要請した再洗礼派との対決直前までのカリキュラムが記されており、おもには修辞学の重要性について論じられている。第三節によると、再洗礼派との対決

それに対する社会福祉についてルター神学の観点から論じている。こうした議論を踏まえて第四節で著者は、ブーゲンハーゲンの神学の中心に社会福祉の精神をみいだし、彼の作成した教会規則を分析する。最後に著者は社会福祉の破綻を嘆き、「格差社会の未来はグローバルな規模で、果たしてどこに行き着くことになるのであるうか」(一四四頁)と本書第一部の研究編を開じる。

第二部の翻訳編の紹介に入る前に、研究編の問題点をいくつか指摘しておこう。十年にわたって公表された諸論考からなっていることもあり、やや全体としてのまとまりに欠けるのは許容されるべきなのかもしれない。とはいへ論文集ではなく、一冊の研究書として、「メランヒトンの思想世界の全体像を、その人間学と教育を中心にして俯瞰する」(はじめに三)という主題を設定するのであれば、各章に散見される繰り返しの多さや構成の論理的な弱さは気になる。全体の構成でいえば、第五章はその前半部では本書の目的との関連性をみると、後半ではその意義が不明瞭になつていて。もちろんそこで扱われる格差や社会福祉といった主題そのものは重要なものであり、議論もまた興味深いが、本書の一部としてどのように機能しているのか分かりづらい。加えて、カウフマンやシャイブルやフランクらの最先端の宗教改革、なかでもメランヒトンに関する研究を深く読み込み、かつ彼らと個人的な交流もある著者の書物だからこそ、

がメランヒトンに人間の意志の力や自然法の重要さ、それらと関係して民衆の道徳化を進める教育を強調するようになつたという。というのも、聖書のみ、あるいは直接的な啓示のみをあらゆる真理の源泉とみなすならば、人は社会秩序の破壊を躊躇しなくなるからである。メランヒトンにとりこうした既存の秩序は神の法の一部であり、むしろ保持されるべきものであった。したがつて、人々がこうした「危険思想」に陥らないためにも、教育は不可欠であると確信するにメランヒトンはいったのだと著者は述べる。

第五章では、メランヒトン本人ではなく、彼と関係の深い三人の宗教改革者カメラリウス、ルター、ブーゲンハーゲンの著作から、ルター主義における倫理觀の発展が分析される。まず著者はカメラリウスの教育論に注目することで、メランヒトンとの共通点を浮かび上がらせる。次にルターの大教理问答書の最大の特徴である「子どもとなる」ことに注目し、常に神に立ち返り、へりくだる重要性を論じる。第三節で著者は、突如として格差社会や現代における不平等について論じ始め、不平等性の高い国にカルヴァニズムを中心とした禁欲的プロテスタンティズムが多く、平等性の高い国にルター派が多い理由を問う。著者によると、カルヴァニズムにおいては人間の積極性と自己責任が重視されたのに対し、ルター派においては自分を神の容器と感じる受動性が強調されたという。それと関連して、第三節の第二部と第三部では貧困と

先行研究と比較した上で本書のオリジナリティがどのあたりにあるのかを読者としては知りたい。教育概念からメランヒトンの思想を分析するという本書の手法が興味深く、独創的にみえるからこそ、そうした比較がないのは惜しまれる。とはいへこれらの点を踏まえたとしても、著者の長年の研究の成果である本書が、メランヒトンの教育概念を理解する上で非常に有益なのは疑いもしない事実である。この確信は第二部の翻訳編をみるとさらに深められる。そこではメランヒトンの代表的な十四の著作が訳出されており、聖書解釈から哲学書の解説にいたる彼の教育思想の中核がよくわかるように配慮されている。これらの現代語訳はすでに存在しており、手が届かなかつたわけではない。しかし読みやすい日本語に訳されており、初学者であつても手に取りやすい点は、今後の研究の発展への大きな寄与であろう。十四の著作は以下の通りである。

- 一『聖書学士提題』(一五一九年)、二『現世の義とキリストによる義の違い』(一五二二年)、三『福音と哲学の違いについて』(一五二七年)、四『学習の規則について』(一五三年)、五『倫理学概要』(一五三二年)、六『占星学の価値』(一五三五年)、七『哲学について』(一五三六年)、八『自然学について』(一五四二年)、九『ニコマコス倫理学』(第一卷について) (一五四六年)、一〇『心臓(こころ)の部分と運動について』(一五五〇年)、一一『魂についての書』(一五

五三年)、一一『教会で用いられる数多くの語句の定義』(一五五二・五三年)、一三『解剖学について』(一五五三年)、一四『医学という学問について』(一五五五年)。紙幅の関係上、これら全てを紹介することはできないので、以下ではこれらの中でも代表的な著作二点を紹介したい。

一五六六年に出版された『ニコマコス倫理学・第一巻について』を読むと、メランヒトンの目的が単なるテクスト解釈にはないことがわかる。むしろ彼が成し遂げようとするのは、彼やルターが牽引する改革運動にとり有益な神学的な教えを明らかにすることにある。なかでも福音と法(*Ius Dei*)の違い、もしくは神の救いと社会・政治的な領域での正義との違いを明らかにすることが彼の喫緊の課題であった。したがって、アリストテレスの主張を疑い、訂正する箇所も散見される。なかでも、理性は人間にとつての最善を明らかにできるか、という問い合わせについての議論はその良い例だろう。なるほど理性は最善を明らかにはできる。だがそれを実践するのに人は人間の心と意志は弱すぎるとメランヒトンはいう。したがつて、一方ではこのギリシア学者の見解の正しさを認めつつも、それを補つてあまりある福音の真理を学者のテクストを用いつつ毅然と語るのである。ただし、メランヒトンは神学だけを語るわけでもない。『ニコマコス倫理学』の解釈としても興味深い見解がいくつも提示されており、この有名な書物の解釈史としても傾聴に値するものである。

次に、本書第三章でも分析の対象となつた『魂についての書』を取り上げよう。本書では、アリストテレスの『デ・アニマ』の解説であるこの書物のなかでも、感覚や感情や理性や知性や認識の確實性について論じた後半部分が訳出されている。これによつてメランヒトン自身の知性や意志、さらに魂の不死についての当時の学説が明らかになる。こうした議論は、デカルトやライブニツらの見解と比較して読まれてもよいだろう。というのも、近世哲学の認識論や情念論はメランヒトンらの議論を前提としており、比べることで当時の思想世界の多様性と独創性が浮かび上がつてくるからである。しかし、この書物においても、單に哲学的な認識論や情念論を論じるのがメランヒトンの目的ではない。むしろ、こうした自然の知識が神の啓示やイエス・キリストに関する福音とどのような関係にあるのかを明らかにするのが彼の真の目的であった。本文がイエスへの美しい祈りで閉じられていることからもそれは明らかである。

以上が研究と翻訳の二部からなる本書の全体像である。この書物によつて著者はメランヒトンの思想、とりわけ彼の教育哲学を明らかにするにあたつて多大な貢献をしたといえるだろう。しかし同時に、このドイツの教師のキリスト教史や思想史における重要さにもかかわらず、本邦においてはこれまであまり注目されてこなかつたという事実を誰よりもよく知る著者にとって、こうした評価は時期尚早と感じられるか

かもしれない。「その僅かな一部分を本書では垣間見たに過ぎない」(四七五頁)と著者が本書のおわりでいうように、分析すべきメランヒトン自身の著作は膨大にあり、その後代への

影響は計り知れないからである。本書が著者自身、さらには日本における次世代の研究者への足がかりとなることを願いつつ、評者の任を終えたい。